

受験生になれ!

私立高校の入試、センター試験と受験シーズンの突入。自分との戦いが始まった。不安で不安で仕方ない人もいるだろう。不安なんか消えはしない。志望校をつんと下げない限り消えない。不安は、きみが今の志望校を目指す以上どこまでもついてくるのだ。だから連れていけ。連れていって、大きくならない方法を実行するのだ。そして、それはただひとつ。やるべきことはやる。時間はまだある。知識は今はいまいで、あと一回やれば強いものにかえられる。解けない問題もあと一回やれば解けるようになる。やるものを書き出して



「あと一回」「あと一回」を目標に過ごすのだ。苦しめてたまらなかつたら泣け。塾でグチれ。はき出せ、そうすればまたきみは立ち上がれる。きつときみは大丈夫。きみには、親も友人も、そして私達もいる。みんなきみの応援団。きつときみは頑張れる。(小林健)

選択肢

毎年この時期になると生徒に感心させられることがある。黙々と勉強をこなす。頑張りが半端ではない。全く頭の下がる思いだ。しかしその反面、勉強がうまくいかない、もう私立入試も始まっているのに、全然勉強に取り組みしていない、そんな生徒もいる。私がどつだったかは後者にあてはまり、高校

入試においては、本当に勉強はしなかった。時代や地域性もあったのだろうがそれでなんとかやってしまった。だからその後苦学するのだが。では今の生徒たちはどのように考えているのだろうか。何故勉強に本気で取り組めないのだろうか。私の時代に戻ると、そのころはまだ子供が非常に多い時代であり、高校、大学、社会人になるための関門がとつともない倍率になっていた。だから頑張るしかなかった。そしてある程度将来が保障されているような気もした。そこに自分自身の考えがなかったとしても、しかし今はどうだろうか。このメディア飽和の時代である。たいていのことは生徒たちも一度は目にし、そして聞いていることばかりだ。景気が落ち込んでいること、政治が混乱していること等。では自分自身の将来が不安にならないのか。ここで、私もどつだったのではと思うことがある。情報が多すぎるとそれらを取捨選択する。自分に都合のいい情報だけを取り出し、都合の悪い情報を削除する。そのような気がした。



また私たちは自分にとって新しい知識を手に入れることの喜びを知っている。そして同時にそのためには決して楽ではない過程があることも知っている。そして手に入れる前よりも自身自身が少しは成長したという満足感を得られることも知っている。ところが、全てではないにしろ、インターネットの世界に入り込めばある程度知ることの知ることのできる環境があるのが今の時代だ。それも一昔前まではパソコンでしかできなかったこと。これらが、今や携帯電話を通じていつでもどこでもできるものになっている。その意味において、苦学は発生し

ない。このような便利な世の中では勉強に対する価値は見つけにくいのかも知れない。

しかし、将来の自分自身の進路において幅広い選択肢を残すという意味において勉強をして高校、大学へと進学することには今をもってしても大きな意味がある。その手助けをすることができるというのは、私にとって大きな意味を持つ。受験が始まっているがあと2か月弱でできる限りの手助けはしたい。(岡本)

変わる心

毎年、中3生を送り出す季節になると、生徒の人生に関わった喜びを感じるとともに、成長した生徒を見て自分の人生を振り返ることがある。

人は歳を重ねていくと、それまでの価値観や人生観を変えるいくつかの出来事に出遭う。私にとつてはそれが友人の死だった。

当時小学5年生、私はクラスで問題児の部類に入るほどの元気よさでいた。亡くなったM君とは幼稚園のころからずっと一緒だったが、彼は習い事が多かったため、たくさん遊んだりすることはなかった。亡くなってからM君の母親から聞いたが、彼は私みたいな元気よさに憧れていたそう。

その彼が私の野球チームへ4年生の時に入団してきた。私の野球チームは高学年主体のAチーム、中学年主体のBチームとなっていた。5年生になったとき6年生が少ないことから私を含めて6人がAチームへ行くことになり、M君はBチームのキャプテンをすることになった。

彼と一緒に練習ができる機会は少なかったが、夏の合宿で久しぶりに一緒に練習することができた。その日の夜は近くで寝ることになり、話をしたら「最近、首が痛くて湿布をしているんだ。」と聞いていて、私は首でも凝っているのだろうかと思っていなかった。

2学期になり、同じクラスのM君は学校に来なかった。学校に行ってみると担任のT先生がかなり険しい表情で話をした。「みんなM君がいないのは知っているな。実は、大病院に検査入院している。しばらくは来られない。」それを聞いた時、もしかしてあの時の首に何かあったのではと思った。そして2週間が経ち、検査結果は脳に腫瘍があるとのことだった。T先生は「長い入院生活になるかもしれないから、みんなで励まして。」とテープに応援メッセージを録音した。しばらくして本人からテープが返ってきた。そのときの言葉は、今でも鮮明に覚えている。「みんなみたいに元氣になりたい。勉強したい。遊びたい...」

それから何度も手術を繰り返したが、腫瘍が取りきれず、君は2月10日に亡くなった。私は学校代表として、お葬式に参列した。お棺で眠るM君の横に花を置き、君の分まで野球で頑張ることを約束した。M君の母親からは、妹のことで相談したいときは、話を聞いてね。」と言われた。M君には2つ年下の妹がいた。その後は、自分の妹と同じくらいその子と話すことが多くなった。

そのあとは、君にした約束を守るべく、6年生12人だけの野球チームで県大会を勝ち進み、全国大会へ行くことができた。スポーツ新聞などでは、13番目の選手としてM君が注目さ

れた。それは、私たちがいつもベンチに写真を飾り、みんなで黙とうしてから試合へ行ったからだった。君への想いがみんなの力となっていた。

私は、それまで誰かのためとか、誰かの分まで頑張りたいと思ったことなどなかった。常に自分中心で物事が進まない嫌だった。しかし、このことが私を変え、何でも一生懸命取り組むよう導いてくれた。それまでは歌もまじめに歌っていなかったのに、M君は音楽も好きだったから自分もやってみよう音楽部にも入った。

最近、何でもやる気がでないという生徒が多い。一生懸命やるのが恥ずかしかったり、やりたいことが見つからないというのもあるのだろ。だが、少し目線を変えて自分の環境を見つめてほしい。やりたい習い事ができ、行きたい塾にも行ける、さらに友達と思いきり遊ぶこともできる。そのような環境を作ってくれている親、友達など周りの人たちと健康に感謝して、自分がチャレンジできる喜びを少しでも感じてもらいたい。(小林(英))

脳が溶ける？

百年に一回の恐慌だとか、世界恐慌以来の未曾有の危機だとか騒がれている。私見は述べないが、とにかく大変なことになりそうである。塾に通う生徒の学費のこと、OB達の就職のこと、卒業生はきちんと大学生活を送れるだろうか等、心配は尽きない。

高校生の中には、「おれたちって運が悪いよな。ずっと景気悪いんでしょ。」という生徒もいて、少しは共感しつつも、景気についての認識

の差は大きいので、余りきちんとした返事もできない。ただいえることは、これは社会が、人類が全体として選択したことであって、しっかりと向きあっていくしかないということである。

「私は関係ない、私は知らなかった。」ではないのだ。もし、「関係ない」とか「知らない」が許されるとすれば、それは政治や経済を中心となつて動かす人達に全てを委ねたということになる。確かに個人の力は小さい。しかし、個人の認識が何千万、何億と集まれば全体の動き方が決まるといふことは忘れてはいけない。

さて、小学生も中学生も高校生、大学生も、全体としては実に享乐的な生活を送っている。ケータイに毎月一万円使つ。ゲームに夢中。読むのはコミック。ゲーセン大好き。テレビがないと生きていけない。パソコン命……。親の金を使って、毎日楽しい時間を過ごす。「別にそれほど楽しくもないけど他にすることもなし……。」「などとはさく生徒もいる。勿論、時代によつて遊ぶ道具は変わるものだし、ゲームを通して友人関係を育むという側面もあるのだから、全てをゼロにしろとはいわない。しかし、人類史上例をみない「子供達の享乐的な生活」は、このまま肥大し続けていつてよいのだろうか。

私は反対である。他にやるべきことはたくさんある。それを味わわないまま大人になつても口くなくはない。こんなことを続けていたら脳が溶けてしまふと思つ。(今回の危機で、大人の財布のヒモがきつくなればと思つたりする。)

では、どうすべきか。道具に身を委ねる時間を縮小するしかない。これは、一つは親の責任でもある。但し、突然変身して、親が一方的に強権発動してもうまくいくはずがない。マイケ

ル・ゴードンなどの「親業」関係の本を読んで十分に準備してかかるべきだ。そして、また一つには本人の責任である。道具に身を委ねて送る生活の中で身につく「生きる力」はゼロに近い。この記事を読んでいる高校生あるいは中学生は、それなりに問題意識をもっていると思つが、恐らくきみたちはこれから様々な問題に直面することになる。



そのとき、自分の力で一つ一つ解決していかなければならぬ。小中高と、そのための力、実は「生きる力」を身につけるための準備をする期間なのである。子供らさ、子供のときの夢想の快さ、時間を忘れて遊ぶことの意味を大事にする人間であるから、私は勉強勉強と追いつてつもりはない。しかし、道具に身を委ねて生きることは、よくないという自覚はもつてほしいと思つ。

では、みなさんどうするか? 「いい学校」や「いい大学」に入ることを目標にすることを、選択しても、それは悪くない。「学歴」は一種の保証書みたいなもので、きつとないよりあったほうが便利だろう。ただ「いい大学」へ入ったからといって、良い人生が約束される訳でもない。その個人の人間性、適性など様々なものが、「幸福」を左右するからである。そのことを、分かつたうえで、志望校を決めて努力するのはよいことである。実は志望校に向けて勉強することですべて身につくことがたくさんあるのだ。私達は、それを知っているが故に、そしてそれが身につかないまま学業を終えてしまつて発生する損失を知るが故に、この仕事をしているのだ。今日は、紙面の都合上、それには触れないが、勉強を頑張る人は頑張りなさいと自信をも

つていえる。いやいや、学校に通っている人は、全員頑張りなさいということだ。ところで、今回のニュースに「M君のこと」が載っている。我孫子教室の小林(英)先生の記事だ。私はこれを読んで感動した。で、その延長として次の話をしたい。生きるうえでしなければならぬことに、「他の人の人生」に触れるということがある。だから、肉親は自分の人生をおおいに語るべきだし、大人は話すべきである。冠婚葬祭は、他の人の人生の区切りとなる出来事だから出るべきである。焼場に行つて自分の知っている人が最後は灰になることを実感すべきである。ただし、他の人の人生に直接触れるのは限界がある。そこで、文章の出番だ。きみたちは「M君のこと」を読んで「他の人の人生」に間接的に触れた。これはすごく良かったのである。こういう経験をいっぱいすべきである。そのために、いろんなものを読まなければならぬ。中でも、すぐできるのは、新聞の投書欄を読むことだろう。「声」とか「気流」とかいつ所である。毎日、そこだけは読むようにするのである。せつかくいただいた生命を持ちながら、道具に身を委ねて狭い世界の中で、伸びきれないまま体だけは大きくなっていくきみ達の在り方を少し変えてくれるはずだ。(以下次号)

(小林健)

▲ 継続希望の方へ ▲
▶卒業や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
▶在籍していた教室までご連絡下さい。

創学舎の本

愛の壁

お父さんお母さんあなただけの愛の壁に届く
著者：小林 恵右
2006年5月1日発行(1,500円)

新星堂他全国書店にて
好評発売中!